

NY育ち 甲子園に憧れ

追いかけた先に

1

「ジョーイ、頼むぞ！」
ベンチから声が飛ぶ。

長野大会開幕1週間前の6月29日。上田西のディロルフ・ジョセフ亜希羅（3年）は、甲子園をかけて争うライバル・佐久長聖との交流戦のマウンドに立っていた。両校のブルースバンドやチャリダーが勢揃いで見守る中、長い手足を使って打者から三振を奪うと、拳を握った。

強豪校の両校が、大会前に交流戦を開くのは今年で7回目。長野大会のベンチ入りメンバー20人から漏れた両校の選手が、この日限りの背番号をつけて戦う。両校で70人余が出場し、ジョーイもその1人だ。

米国人の父と日本人の母の間に生まれ、2歳からニューヨークで暮らした。家から近いヤンキーススタジアムには何回も通った。イチロー、松井秀喜、田中将大……。目の

上田西・ディロルフ・ジョセフ・亜希羅君



交流戦で本塁に生還したチームメイトをたたえるディロルフ・ジョセフ・亜希羅（右から3人目）ら上田西の選手ら＝6月29日、県営上田野球場

当たりにした日本人選手たちのプレーに憧れた。そして、日本では毎年、予選を勝ち抜いた全国の高校のチームが「甲子園」という場所で行われる、日本一を決める大会があること、多くの日本人大リーグも、かつてはそこでプレーし、ファンの間で語り草となっていたことを知った。

「日本の高校で野球をしたい。甲子園に行きたい」
甲子園のような高校野球の大会は、米国では聞いたことがなかった。2年前の春、母と共に長野県に転居し、前年の夏に甲子園に出た上田西に入学した。

しかし入学後、走り込みを重ねる中で、右足に抱えた痛みが耐えきれない程になっていった。以前疲労骨折した箇所付近で、軟骨のかけらが遊離し、患部で炎症を起していた。

苦しい時は、いまは離れて暮らす父の言葉を思い出した。ボードゲームをして遊ぶたびに、「最後まで結果はわからないぞ」と英語で口癖のように話していた。「あきらめなければ良いことがあるんだ」と信じ続けた。

3年生になると、治療の効果がはじけ、試合では制球が安定し、変化球で空振りを取れるようになった。入学してから一度も入ることができなかった公式戦のベンチに入ることが、最後の夏の目標だったが、かなわなかった。

それでも、「けがをしてから、良いこともあった」とジョーイは言う。走ることが当たり前じゃないこと、試合に出られない人の気持ち、プレーがうまくいった時のうれしさがかかるようになった。

交流戦で、最初で最後の背番号「1」をつけて投げたジョーイは、「1年前のこの時期は松葉杖だった。投げさせてもらって本当に幸せ」と声を震わせた。

これからは、3年ぶりの甲子園をめざすチームを支える立場にまわる。「大きい声には自信がある。全力で応援したいです」
敬称略
（大野扶生）

第100回の大きな節目を迎える高校野球長野大会。

「信州夏100回」の第4部として、「追いかけた先に」

「イマドキ高校野球」の二つの連載（いずれも全5回）を始

めます。「追いかけた先に」

では、さまざまな環境で夢を追いかける高校球児の姿をお

伝えます。「イマドキ高校

野球」では、これからの野球の在り方のヒントになりそうな、学校や球児たちの工夫や取り組みを取り上げます。

最速119キロ 目標はプロに

追いかけた先に

2

野球に懸ける信州球児は男子だけじゃない。8月に米国で開かれる第8回WBS C女子野球ワールドカップ(W杯)で、大会6連覇に挑む日本代表「侍ジャパン」のメンバーに、長野市出身の女子高校生投手が選ばれた。

京都両洋高(京都市)の坂原愛海(3年)が野球を始め、3歳の兄と同じ長野市の軟式野球のチームに入り、6年生になると主将を務めた。

中学からは千曲市の硬式野球チームでプレー。ここでは、女子は自分1人だけ。成長期を迎えた男子チームメイトに次々に身長を抜かれ、球速や打球の伸びも、次第に男子との差を実感するようになった。それでも、変化球を習得するなどの努力を重ね、3年生の時には2番手の先発投手として活躍するようになった。

この頃、女子の侍ジャパンの本を読み、女子のプロ野球

女子野球日本代表 長野出身・坂原愛海さん



女子野球W杯日本代表に選ばれた長野市出身の坂原愛海＝京都両洋高校



京都両洋高のユニホームを着てプレーする坂原＝上田玲監督提供

の世界があることを知った。「プロの選手になりたい」。女子の硬式野球部がある高校を探したが、長野県内にはなかった。体験入部に参加して、明るい雰囲気にかかれた京都両洋高を選び、住み慣れた地元を離れての寮生活が始まった。

授業が終わったら、急いで

練習着に着替えてバスに乗り込み、40分ほどかけてグラウンドへ。練習後、帰宅は夜8時ごろ。夕食や洗濯を終え、と、あっという間に点呼の時間だ。オフは友人と京都・河原町で買い物をしたり、カラオケに行ったり。

1年生から投手として試合に出場した。最高学年となっ

た現在、10人余りの投手陣のリーダーとして練習を引っ張る。女子高校生としてはトップレベルの最速119キロの直球を中心に、スライダーやカーブ、ツーシームなどの変化球で打者を打ち取る。上田玲監督(36)は「非常にやわらかいフォームで(球を)放る」と坂原の投球を評価する。松浦美佳コーチ(33)は「負けず嫌いで人一倍練習するため、今年の冬は食事トレーニングにも取り組み、茶わんいっぱい白飯や、苦手な肉も残さず食べた。

昨年、女子野球W杯の日本代表トライアウトに応募した。「経験と思って受けてみる」という父の勧めだった。書類とビデオによる1次選考と、プロ選手も含めた代表候補の合宿を経て、代表20人の一人に選ばれた。寮に戻る。ルームメイトが「おめでとう」。LINEを開くと、家族やチームメイトからお祝いのメッセージが届いていた。「受かるのは無理でしょ、と思っていた。出番ももたらしたら頑張りたい」。8月22日からの大会に挑む。

今後の目標は、高校の全国大会での日本一と、プロチームの入団テストの合格だ。

「自分が小さい頃に夢を与えてもらったように、子どもたちに夢を与えられる選手になれたらいいな」 敬称略 (大野 扶生)

合同練習 年齢差越えて

追いかけた先に

3

「1アウト満塁！」

6月10日の日曜日。安曇野市の穂高商のグラウンドを訪ねると、小林武郎監督(55)が叫び、ノックの打球を飛ばしていた。現役の高校生部員と、50代前後のOBたちが各守備位置に分かれ、白球を追った。

人数不足で日々の練習にも苦労する穂高商の部員と、「もうひとつの甲子園」をめざすOBとの合同練習が、この日実現した。

学制改革で中等学校が高等学校と改められた1948年、穂高商(当時は穂高農)は夏の甲子園に初出場した。OB会長の山本定明(76)も、3年生の夏に長野大会4強入り。「自分の学年は160人余りが野球部だった」と振り返る。

しかし、初の甲子園から70年後の今年、穂高商の男子部員数は各学年2人ずつの計6人。2年ほど前から、入学する野球経験者が激減した。

古豪・穂高商 現役部員とOB



穂高商の現役とOBが、シートノックで汗を流した=6月10日、安曇野市の穂高商グラウンド

夏の長野大会には、校内で助っ人を集めて単独で出場することを選んだ。だが、助っ人の多くは7月の文化祭の準備で土日の練習に参加できないことが多い。人数が少ないため、試合形式の守備練習も満足にできない。

選で勝ち進むほど、11月の本大会に出場する県選抜チームに入れるメンバーの枠が増える。次の試合に向け、硬式球を使用できる練習場所を探していたOB会側が野球部に打診し、合同練習が成立した。

一方、OBたちは、今年から始まった「マスターズ甲子園」の長野県予選に出場し、8強まで勝ち進んでいた。予

この日、現役部員5人とOBたちは、1週間後のマスターズ甲子園予選の試合に向け、フリー打撃やシートノック

クで約3時間汗を流した。現役と年齢は3倍くらい違うが、グラウンドに立てば同じ。練習後、OBの一人、柳沢彰(59)は「体のあちこちが痛い、自分も若返ったような気分」とさわやかな表情。約35年前に卒業した下里智彦(53)は「卒業したら、高校には戻れない。現役と一緒に、また母校で野球の練習ができると思わなかった」と話し、他のOBとの野球談議に熱が入った。

主将の遠藤知希(3年)は「今までできなかった練習ができた」とOBの助けに感謝する。じつは昨夏の大会後、部員不足の厳しい状況から、遠藤は部をやめることを考えていた。

例年は、大会後すぐに練習を再開したが、小林監督は「すぐに切り替えると言われない。先輩と遊んで」と論じた。遠藤は、いったん野球から距離を置き、先輩と川遊びに出かけたり、家に泊まったり、一緒に夏休みを満喫した。そのうち「先輩たちが支え続けてきた部を守りたい」という気持ち芽生えた。

他校との連合チームではなく、単独で長野大会に出ることを選んだのも「最後は穂高の野球部で終わりたい」という強い思いがあったからだ。「どんな高校が相手でも、がむしゃらに元氣よくいきたい」と最後の夏に向けて意気込む。|| 敬称略(大野択生)

地域も応援ひと味違う

追いかけた先に

4

人口5千人弱の筑北村。6月下旬、深い霧に包まれた畑で、ジャージに長靴姿のウエルネス筑北の野球部員7人が、青々とした野沢菜を両手に抱え、きびきびと動き回っていた。

村人が刈り取った野沢菜を、計量器で5キログラムずつ量り、束にする。シートの上に、野沢菜の束がうずたかく積み重ねられていく。2時間にわたる手伝いを終えた後、投手の市川竜巳(3年)の額にはじっとり汗がにじんだ。「こっちの方が練習より相当きついっす」ウエルネス筑北では毎週木曜午前、生徒が住民の求めに応じ、道路清掃や農作業などのボランティア活動をする。この農園で働くのは50〜70代のお年寄りを中心。農園を営む茅野宝(58)は「今年は作業できる人が減って困っていたので、とても助かる」と感謝した。

ボランティアは、学校側が

創部3年目の夏 ウエルネス筑北



収穫された野沢菜の束の重量をはかるウエルネス筑北の部員ら＝6月下旬、筑北村

村へ感謝の意を表そうと、開校当初から続けている活動だ。通信制高校のウエルネス筑北が開校したのは3年前の2015年9月。05年に三つの村が合併してできた筑北村は、いくつもある稼働率が低い公共施設の活用法に困り、使われなくなった校舎や野球場を学校側に提供している。

若いチームにとってボランティアはプラスの効果もある。市川は「力仕事なので、打撃の力をつけるのに役立つし、団結力も高まります。村の人が練習試合を見に来てくれて『あそこで打ってすごいね』『頑張れ』って言われて。うれしかった」という。

「いけないから、チームをまとめるのが難しかった」と振り返る。だが学年が上がり後輩ができる、しだいに責任感が芽生えてきたという。

時間があれば練習試合を見に行くという村長の関川芳男(71)は「村での体験を覚えてほしい。応援していきましょう」と期待する。

チームの中心となる3年生は、野球部ができた16年春に入学した「1期生」。主将の河野健太郎(3年)は「先輩

さらにチームの求心力になっているのは監督の中原英孝(73)。松商学園と長野日大で春夏の甲子園計14勝を挙げた名将だ。チームには、かつて中原に薫陶を受けた教員の、子や弟も集う。

捕手の内藤友哉(3年)の父は、1991年春の選抜大会で中原率いる松商学園が準優勝した時の一塁手。「監督の試合の読みはすごく当たる」と信頼する。打線の中心の遊撃手、赤羽由紘(同)の兄は、長野日大が2009年夏に甲子園に出場した時のメンバーだ。

昨年秋の県大会。ウエルネス筑北は、夏の長野大会の覇者・松商学園、準優勝の佐久長聖を連破。創部から約1年半で初優勝という快挙を遂げた。エース高山運(同)は「力の差は相手が上だったけど、皆で力を合わせて勝った」と振り返る。

全学年が初めて部にそろった創部3年目の今年、夏に懸ける思いは、今までとは違う。中原は「高校野球はそんなに甘くない」としながらも、「他の学校はうちとは当たり前たくないだろう」と自信をのぞかせた。

|| 敬称略
(大野択生)

震災で転居の地 最後の夏

追いかけた先に

5

松本深志の「小林兄弟」が、最後の夏を迎える。

父は画家、母はオルガン奏者。両親の留学先のドイツ・シュツットガルトで、兄の綾と弟の絃は生まれた。5歳の時に千葉県流山市に引っ越し、幼稚園の友達に誘われて一緒に野球を始めた。

一家が松本市に引っ越したのは、2人が小学校を卒業するとき。きっかけは、2人が小学校4年の時に経験した2011年の東日本大震災だった。東京電力福島第一原発事故の影響で、流山市を含む千葉県北西部には放射線量の高いホットスポットが点在。汚染土の処分法を巡っては、地域で混乱が広がった。

子育ての不安が高まる中、2人の両親は転居を決断。千葉県原発事故の医療支援活動で知られる菅谷昭市長がいる松本市を新たな暮らしの場を選んだ。入学した中学校は、知らない子ばかり。

松本深志の「小林兄弟」



松本深志の小林綾（左）と小林絃＝松本市野球場

「引っ越してきた理由を話すと、放射線って何？と聞き返された」と絃は振り返る。

松本深志では、1年生の春の県大会中信予選で共に初めて公式戦に出場。1年生の秋からは1桁の背番号を背負い、チームの中心選手となった。

2人とも140キロ台の速球を投げ、打撃技術も高い。周りから「深志の小林ツインズ」と注目された。けれども、双子、双子と取り上げら

れるのはあまり好きじゃない。「2人ではなく、個人として注目されたい」と綾は言う。家では綾の部屋にある筋トレ器具の取り合いが日常茶飯事。「絃はコミュニケーション力が高い」と綾が言え

ば、絃は兄を「不器用。もう少し大人になって」と一刀両断する。

ただ、プレーでは「打撃は絃のほうがセンスも力もある」（綾）、「綾は投手の能力が高い。頼れる存在」（絃）

と互いを認め合う。小中学生の頃は、同じチームで2人でバッテリーを組んできた。絃がマスクをかぶるときは、投手の綾が「このカウントならどんな球を投げるか」がわかったという。「何を考えているかは基本的にしゃべらなくてもわかる」と絃。2人の名前に入っている「糸」の字は、「兄弟仲良く」という両親の願いだ。

チームメートにも、兄弟の存在は刺激となっている。外野手の西尾豊（3年）は、「2人に追いつけ追い越せでやってきた」と自負する。綾、絃とともに1年生の秋から試合でプレーし、今はチームの不動の4番打者。守屋光浩監督も「（綾と絃の）2人よりも打てるから4番に置いている」と信頼を置く。

3年目の夏を迎え、綾は最速148キロを投げるエースに、絃は投打に秀でたチームの主将に、それぞれ成長した。

チームは71年ぶりの選手権大会出場をめざす。春の県大会では3位に入り、「今までで一番甲子園に近い状態がする」と綾。絃は「ずっと期待されてきた。先輩たちに恩返ししたい」。過去2年はいずれも準々決勝で敗退。今度こそ、と思いは強い。

＝敬称略
（大野択生）